

龍田道の桜 — 高橋虫麻呂の餞別歌 —

一 三つの龍田道の歌

高橋虫麻呂には、龍田道を舞台とする歌が、大きく捉えて三つある(一)。題詞によって掲げれば次のとおり。

- ① 四年 壬申、藤原宇合卿、西海道節度使に遣はさゆ
る時に、高橋連虫麻呂が作る歌一首并せて題歌

(697—72)

- ② 春三月に、諸卿大夫等が難波に下る時の歌二首并せて題歌

(917—947—8、949—950)

- ③ 難波に経宿りて明日に還り来る時の歌并せて題歌

(917—951—2)

①は、天平四年(732)、藤原宇合が西海道節度使に任ぜられた折の餞別歌、②と③は、ある年の春三月に諸卿大夫等とともに難波に下った折の歌である。②と③は連続した作で、関連性があることは明瞭。一方、①の歌は②③の歌とは一見無縁であるように見える。が、この歌もまた、②③の歌と、表現上、深くかわると思えられる。本稿では、①の歌と②③の歌との関連性につ

錦 織 浩 文

いて考え、①の歌にこめられた虫麻呂の思いを探る。

二 春の龍田道

- ①の歌は次のようである。

四年壬申に、藤原宇合卿、西海道節度使に遣はさゆる
時に、高橋連虫麻呂が作る歌一首并せて題歌

白雲の龍田の山の露霜に色づく時に 打ち越えて旅行く
君は 五百重山い行きさくみ 敵まもる筑紫に至り 山の
そき野のそき見よと 伴の部を班ち遣はし 山彦の答へむ
極み たにくのさ渡る極み 国形を見したまひて 冬こ
もり春ざりゆかば 飛ぶ鳥の早く来まさね 龍田道の岡辺
の道に 丹つつじのにははむ時の 桜花咲きなむ時に 山
たづの迎へ参る出む 君が来まさば (697—72)

反歌一首

千万の軍なりとも言挙げせず取りて来ぬべき士とぞ思ふ
(972—)

右は、補任の文に換すに「八月十七日に、東山・山陰・
西海の節度使を任ず」といふ。

天平四年（七三二）八月十七日、藤原宇合は西海道節度使に任命された。右は、その折の饒別歌である。この長反歌は、幾人かの人々とともに国境の龍田山の麓まで宇合を送り、そこで催された送別の席においてうたわれたものと察せられる（窪田「評釈」）。長歌において虫麻呂は、出立時における龍田山の黄葉の様子を叙し、目的地に至った後の宇合の活躍の様子をうたい、龍田道で無事に再会できることを祈って終わる。全体として、宇合の先行きを予祝する意が強く現れており、窪田「評釈」が説くように、この歌は、送別の席でうたわれる歌としてふさわしい。

本論が注目したいのは、長歌において虫麻呂が、宇合との再会の時期を春に、場所を龍田道に設定していることである。『萬葉集』に龍田道をうたう歌は十九首。王朝和歌では、龍田道は秋と結びつく歌枕となるが、すでに『萬葉集』において、「龍田」といえば「秋」ということが意識されている（廣岡義隆「龍田・岩瀬森考」美夫君志第三十一号・一九八五年、米田勝「竜田の紅葉―その文芸的背景―」奈良文化女子短期大学紀要第二十号・一九八九年など参照）。その中であって、虫麻呂は、現実ではない、まだ見ぬ春の、桜咲く龍田道をうたう。これは珍しい例である。宇合の帰還が春になることも、帰還の道が龍田道になることも、実際には確約されていたわけではなかったろう。虫麻呂は、なぜ

再会の場面をこのようにうたったのか。

吉井巖「全注六」には、

出発と帰還の場面を同じ竜田にとり、黄葉に色づく出発に前途への緊張の色を、丹つじと桜花咲きにほふ春に喜びの予祝の情をあらわし、無駄なく全体を構成して、要点をおさえた表現は、作者の力量を示したものであらう。

と説き、『釈注』に、

この布石には、黄葉の秋と花咲く春との対比もある。それは、「今」と「将来」との時間の対応でもある。宇合が春に帰ると決まっていたわけではあるまい。「春」は歌の上での趣向で、「秋」に対する「春」を持ち出し、その春の花の色美しさを描くことによつて、めでたい帰還を先取りしたいというのが、虫麻呂の心であつただらう。春の栄えの描写は宇合の行く先の幸いを包み込むという意識もあつたかもしれない。

と説く。

虫麻呂が再会の場面を今見るようにうたったのは、たしかに、こうした、宇合の無事の帰還を言祝ぐ、表現上の配慮があつてのことであらう。そして、虫麻呂は、龍田道を彩る花として、つじと桜の花とを取り合わせた。『萬葉集』には、「つじ花にほえ娘（とめ） 桜花栄え娘（とめ）」（13・3305）という例があり、あるいは、そうした伝統的な表現にならう面もあつたかもしれない。が、ここで、とくに注意をひくのは、桜である。というのも、龍田道の

桜といえ、ただちに想起される歌があるからである。ほかでもない、冒頭に掲げた、②「春三月に、諸卿大夫等が難波に下る時の歌二首」、③「難波に経宿りて明日に還り来る時の歌」がそれである。①の歌は②③の歌を踏まえてうたわれているのではないかと、本論は見る。以下、この点について述べる。

三 「春三月」

②の歌は次のようである。

春三月に、諸卿大夫等が難波に下る時の歌二首并せて題

イ白雲の龍田の山の 滝の上の小鞍の嶺に 咲きををる桜の花は 山高み風しやまねば 春雨の繼ぎてし降れば ぼつ枝は散り過ぎにけり しづ枝に残れる花は しましくは散りなまがひそ 草枕旅行く君が 帰り来るまで

(9 一七四七)

反歌

我が行きは七日は過ぎじ龍田彦ゆめこの花を風にな散らし

(一七四八)

ロ白雲の龍田の山を 夕暮れに打ち越え行けば 滝の上の桜の花は 咲きたるは散り過ぎにけり ふふめるは咲き継ぎぬべし こちこちの花の盛りに 見ざれども君がみ行きは今にしあるべし

(一七四九)

反歌

暇あらばなづさひ渡り向つ峰の桜の花も折らましものを

(一七五〇)

題詞に「春三月」とあるが、何年のことか、また「諸卿大夫等」が誰か、難波に下る用向きが何か、ということについて明示がない。しかしながら、虫麻呂が宇合の庇護をうけつつ歌作を続けたとする通説によれば、この歌は、宇合が知造難波宮事に任ぜられている期間の作で、宇合をはじめとする「諸卿大夫等」が事情により難波に下った時の歌と推察される。宇合が知造難波宮事に任ぜられたのは神龜三年(七二六)十月二十六日。それから六年後の天平四年(七三二)八月十七日、宇合は西海道節度使に任ぜられるから、題詞にいう「春三月」は、宇合が知造難波宮事の任にあった期間、神龜四年三月より天平四年三月にいたる、いずれかの三月と捉えることができる。

この「春三月」は、具体的に何年の三月のことなのか。この疑問を解く鍵は、題詞に「春三月」と記されていること自体に求めることができる。虫麻呂歌において歌の時期を記すのは、先に見た①の歌と当該歌のほかにはない。この「春三月」は、虫麻呂にとって、あるいは宇合にとって、よほど意味のある月であったと想像されるからである。

『続日本紀』天平四年(七三二)三月二十六日条に、
知造難波宮事從三位藤原朝臣宇合等已下、仕丁已上、物賜ふこと各差有り。

という記事がある。この記事に見える宇合らの行實は、難波宮造営工事の一応の完成を果たしたことに對するものと見られる⁽³⁾。このことを重視して、『私注』は、

宇合は神龜三年十月に知造難波宮事となり、天平四年三月、其の事が了つたと見え、物を賜はつて居る。想像を加へれば、造難波宮に関与した諸卿大夫等が、其の完成行實を自慶して、長官宇合を擁して、難波に下つたと見るのは、最可能率の多いことと言はねばならぬ。

として、イロの歌は、天平四年三月二十六日の宇合の行實（難波宮完成）を記念してうたわれていると捉えた。『古典集成』、『新編全集』、『私注』、『新古典大系』、『全解』などに、これを支持する。

この説は魅力に富む。そして、この説のとおり、イロの歌が、天平四年三月二十六日の宇合の行實（難波宮完成）を記念してうたわれたものと見れば、イロの歌について納得のいくところが多い。たとえば、イロの歌では、あわただし難波行き（こと）がうたわれている。そのあわただしさは、ロの反歌の「暇あらばなづさひ渡り（二七五〇）によって端的に表現されている。加えて、「夕暮れに打ち越え行けば」（二七四九）とあるように、出立は夕刻である。しかも、この時の桜の状態は、「はつ枝は散り過ぎにけり」（二七四九）、「咲きたるは散り過ぎにけり」（二七五一）というように、満開の頃を過ぎてゐる。虫麻呂は幾度となく難波と大和

の間を往復することがあつたに違ひなく、より恵まれた状況における難波行き、より恵まれた環境の龍田道の桜のことをうたうことも可能であつたと思われるけれども、この歌が宇合の行實を記念しているのだとすれば、虫麻呂がなぜかような状況下の難波行きのことをうたつたのかという疑問が解ける。と同時に、題詞にことさら「春三月」と記されている理由も理解される。虫麻呂は、天平四年春三月のめでたさを記念して、「春三月」という時期を、ことさら題詞に記したのである⁽⁴⁾。

また、虫麻呂の難波に下る時の歌二首は、長歌二首のまとまりでなる。こうした作は『萬葉集』に次のようにある。

人麻呂吉野讃歌（一三六七・三八〇九）

第一長歌二十七句 第二長歌二十九句

人麻呂石見相聞歌（二一三一・二一三五）

第一長歌三十九句 第二長歌三十九句

人麻呂泣血哀慟歌（二二〇七・二二〇八）

第一長歌五十三句 第二長歌六十七句

赤人吉野讃歌（六九二五・九二六〇）

第一長歌十九句 第二長歌十五句

虫麻呂難波歌（九一七四七・八一七四九）

第一長歌十九句 第二長歌十五句

福麻呂久邇京讃歌（六一〇五〇・一一〇五三）

第一長歌四十一句 第二長歌二十七句

家持安積皇子挽歌（三四七五・七・四七八・八〇）

第一長歌二十九句 第二長歌四十三句

長歌二首のまとまりをなす作は、いわゆる宮廷歌人の作に現れ、讃歌性、儀礼性、公的性格が強い。宮廷歌人ならぬ家持が挽歌にこの形を持ち込んだのは、もちろん、儀礼性を重視してのことであろう。虫麻呂が長歌二首をなしたことに、それなりの理由が存したものと推察される。あるいは宇合から要請をうけてのことであつたか、天平四年三月、虫麻呂は、宇合が獲得したためたさを記念する歌をなすにあたり、長歌二首を運んでうたうことに思い至つたのであろう。長歌二首の型は、人麻呂以降の宮廷歌人が用いてきた、いわば正統な型である。小型な作品にはなつたが、ここであえて、虫麻呂が、長歌二首の型にこだわつたのは、すなわち、正当な型を踏むことにより、宇合の慶事を祝う表現性を高めようとしたからではないかと考えられる。

さらに、第二長歌は「君がみ行きは今にしあるべし」という暗れがましい表現をもつて閉じられてゐる。「釈注」には、

「君がみ行きは今にしあるべし」が放つ前途への明るさには、難波宮改修の大業を成し遂げての最終の旅行きと関係がある
と見るのは、うがちすぎか。

とあるけれども、「君がみ行きは今にしあるべし」は、行賞をうけたあとの長官宇合の難波行きをたたえる表現として、いかにもふさわしい。

しかも、この折の歌は、これで終わりではない。続けて虫麻呂は、③の歌をうたう。

難波に経宿りて明日に還り来る時の歌并せて賀歌

島山をい行き廻れる 川沿ひの岡辺の道ゆ 昨日こそ我が
越え来しか 一夜のみ寝たりしからに 峰の上の桜の花は
滝の瀬ゆ散らひて流る 君が見むその日までには 山お
ろしの風な吹きそと 打ち越えて名に負へる社に 風祭せ
な
(一七五二)

反歌

い行き逢ひの坂のふもとに咲きををる桜の花を見せむ子
もがも
(一七五二)

これによつて、虫麻呂も難波にともない、そこで一泊してすぐさま大和に引き返したことが知られる。ここにいう「君」も、諸卿大夫の一人、藤原宇合をさすと見られるが、虫麻呂は宇合とは別に、一足先に都へと帰つたのであるらしい。主人とは別の道行きの様子をうたうこともまた特殊なことといわねばならない。こうした歌を残したことに、この折の虫麻呂の格別な思い入れを見て取ることができよう。結局、虫麻呂は、長歌を三つも運ねる作をなしたことになるけれども、それは、つまり、主人宇合が難波宮改修の大業を成し遂げ、行賞をうけた喜びを表現しようという強い思いから生まれたものと捉えてよいのではないか。③の歌の「君が見むその日までには 山おろしの風な吹きそと 打ち

越えて名に負へる社に 風祭せな（一七五一）という広く呼びかけるようになりたい方、「咲きををる桜の花を見せむ子もがも」（一七五二）という心弾むようになりたい方を生んだ背景には、主人をもつ誇らしさ、そして、主人の身に訪れた慶事をともに喜ぶ高揚があるように感じられる。

四 虫麻呂の思い

以上述べてきたところを踏まえて、再度、①の歌を見る。

前述のように、②③の歌がうたわれた天平四年春三月、宇合ら一行が難波に下った時には、龍田道の桜はほぼ散ってしまった状態であった。同年八月、同じ龍田道での宇合送別の席において、虫麻呂は、めでたき春、かの三月の様子を振り返りつつ、「あの時の龍田道は、桜の花が散り過ぎていましたけれど、今度大和にお帰りのときには、桜が咲き始める十全な状態で、お迎えしましょう」という意をこめて、この龍田道の桜の花をうたったのではないか。本論の冒頭で注目した、①の歌において、まだ見ぬ春の、桜咲く龍田道がうたわれている、その最大の理由は、ここに認められるのではないかと考える。

通説によれば、①の歌こそが、虫麻呂が宇合に向かってうたった最後の歌ということになる。虫麻呂は、養老三（七一九）頃からこの時まで、およそ十三年にわたって宇合とともにあった。虫麻呂がなぜこの時、西海道に伴わなかったのかは不明。あるい

はこの頃、虫麻呂は、宮廷から宇合家に派遣された事業（家司のごときもの）の任を解かれ、別の役職に任ぜられたか（拙稿「高橋虫麻呂に関する基礎的考察」阿南工業高等専門学校研究紀要第四十号・二〇〇四年参照）。であれば、この龍田道における宇合との別れは、虫麻呂にとって格別な意味をもっていたと想像され、来し方を振り返りつつ虫麻呂がこの歌をうたうことは、いっそうあり得ることであろう。

①の反歌において虫麻呂は、

千万の軍なりとも言挙げせず取りて来ぬべき士とぞ思ふ
とうたう。この歌は、宇合の武運を祈る壮行の意が強い。

一方、「懷風藻」には、この時の心情を詠んだ宇合の次のような漢詩が残る。

五言。西海道節度使を奉ずる作。一首。

往歳は東山の役、今年^{いざよい}は^{いざよい}西海の行。

行人^{きんじん}一生の喪、幾度か^{いくばく}迎兵に倦まむ。

結句に「幾度か迎兵に倦まむ」とあり、宇合の詩情と虫麻呂の反歌の意とが、一見、かみあわない印象がある。この点を取り上げて、金子『評釈』は、「当人はかく迎兵に倦んでゐるのに、『とりて来ぬべき男とぞ思ふ』は、聊か滑稽だ。強ひて助けて、激励の詞として聞くが一番ふさはしからう」と評す。

しかし、宇合とともに旅を続けた虫麻呂であつてみれば、彼は、漢詩に現れているような宇合の心情をよく知っていたに違いない。

虫麻呂は、そうした宇合の心情を熟知するからこそ、その心情を振り払うように、こうした前向きな反歌をうたったのであろう。その意味において、宇合の詩と虫麻呂の歌とは、むしろ、自然な形で響き合っている。

また、この反歌が長歌に連なる饒別の歌であることを思うならば、この歌の根底には、長年ともにあった宇合と別れなくてはならない虫麻呂の、万感の思いが託されているはずである。「取りて来ぬべき士とぞ思ふ」という思いは、虫麻呂が宇合の下にあって十三年ほどの間に看取した、率直な宇合観ではなかったか。であれば、この反歌は、壮行歌でありつつ、宇合讃歌であるということもできる⁷⁷⁾。

虫麻呂の庇護者、藤原宇合は、当代きつての詩人であった。「懐風藻」に詩六首、「経国集」に賦一篇を残し、「萬葉集」にも短歌五首を残す⁷⁸⁾。虫麻呂が萬葉歌人の中にあつて異彩を放つ歌を多く残すことができたのは、庇護者宇合の文学的な器量の大きさによるところが大きいであろう。そして虫麻呂は、宇合の下で「虫麻呂歌集」を編み、これを宇合に献呈することによって、歌を「萬葉集」に残すことができた⁷⁹⁾。

宇合を庇護者に得たことは、虫麻呂にとってしあわせなことであつたに違いない。と同時に、虫麻呂という歌人を手元に置くことができたことは、宇合にとつても、幸いなことではなかったか。宇合の漢詩と虫麻呂の饒別歌とを読み合わせるとき、そういう思

いを筆者は抱く。

注

(二〇一〇・五・一七)

(一) 龍田道については、山本博『龍田越』(学生社・一九七一年)、境田四郎『龍田道』(帝塚山学院大学日本文学研究第五号・一九七三年)、山田弘道『龍田越』(芸林第二十四巻第一号・一九七三年)、廣岡義隆『龍田・岩瀬森考』(美夫君志第三十一号・一九八五年)など参照。

(2) こうした見方を示唆した最初は、『全釈』で、「諸卿大夫も誰ともわからない。作者高橋虫麻呂は藤原宇合と共に常陸におたことあるから、或はこれも宇合らをさしてゐるか。宇合は神亀三年十月知達難波宮事となつてゐる」とある。その後、虫麻呂は宇合のもとで歌作した歌人であるとする見方が通説となるが、そこに至る研究史については、拙稿「高橋虫麻呂に関する基礎的考察」阿南工業高等専門学校研究紀要第四十号・二〇〇四年)において述べた。本論は、通説を可とする立場による。

一方、ロの長歌に「君がみ行きは今にしあるべし」とあることを根拠に、イロの二首を天皇行幸にかかわる作とする説がある。『古義』は、慶雲三年(七〇六)九月二十五日の難波行幸の用意のための難波行幸とし、『全註釈』は、天平六年(七三四)三月聖武天皇難波行幸の下檢分の歌とした。『古義』にいう慶雲三年の作とする説は、慶雲三年が虫麻呂の作歌活動の時期として早過ぎるのに加えて(『注釈』)、九月の行幸に対して、三月の時点で「君がみ行きは今にしあるべし」とうたうことは考

えられず、従いたい。最終的には、天平六年三月聖武天皇難波行幸の下検分の歌とする「全註釈」の説が残る。「注釈」、窪田「評釈」、井村哲夫「高橋虫麻呂―その履歴及び作品の製作年次について―」（『憶良と虫麻呂』桜楓社・一九七三年、初出一九六三年）、坂本信幸「花之盛爾難不見左右」（『万葉集卷九・一七四九番歌の訓詁―（ことばとことのは第10集・一九九三年）、新谷秀夫「虫麻呂の難波に下る時の歌」（『セミナー』万葉の歌人と作品 第七巻）和泉書院・二〇〇一年）などに、「全註釈」の説を支持する。ただし、新谷論文には、「しかし、風神である竜田彦に花を散らすと願う点に注目すると、日本書紀で確認できる竜田の風神祭がすべて四月におこなわれていることから、帰路の一七五一歌で『名に負へる社』と歌われる竜田の風神祭を喚起するのに近い三月下旬の作と考える天平四年説も浮上するのではないだろうか」とも述べている。

一読して明らかのように、この歌にうたわれている難波行きはあわただしく、しかも夕刻の立出である。こうした状況下において、行幸の下検分がおこなわれるということは考えにくいと思われる。また、イの長歌には「草枕旅行く君が帰る来るまで」とある。この「君」は、明らかに「諸卿大夫等」の一人をさしている。が、「全註釈」の説によれば、ロの長歌の「君がみ行きは今にしあるべし」の「君」は、一転して、天皇のことをさすことになる。金井清一「高橋虫麻呂と藤原宇合」（『万葉詩史の論』笠間書院・一九八四年、初出一九七八年）に述べているとおり、これは、関連性のある二首の中にあつて自然なこととは思われない。「私注」に説くように、イロの「君」は等

しく「諸卿大夫等」の一人をさしていると捉えるのが自然である。すなわち虫麻呂は、イの長歌において、散り残っている桜花に呼びかける形をとり、反歌において、桜花を支配する風の神に語りかける形をとりつつ、「君」のために春の美景を少しでも残しておきたいという心やりを表出し、ロの歌において直接「君」に呼びかける形をとって、「君がみ行きは今にしあるべし」とうたい、「君」の難波行きが今この時であることを高らかに宣言している、と捉えるべきであらう。

このように捉える場合、前掲井村論文、新谷論文などに説くように、第二長歌の「君がみ行き」（原文「君之三行」）は、天皇の行幸の意で用いられた例ではないということになり、そこに問題があるようだけれども、この点については、桜井満「高橋虫麻呂」（『万葉の歌人 和歌文学講座5』桜楓社・一九六九年）に、

ミユキの語が集中歌句に用いられた確かな例は、これが唯一のもので、いわゆる行幸の場合は「行幸」「幸」「幸行」「御駕」などの文字で、イデマシというのが普通である。ただ「天皇之行幸乃随意」（巻四、五四三）、「天皇之行幸之随」（巻六、一〇三三）の二例は、音数の関係からミユキノマニマと訓まれたりしているが、「行幸」の主語が「天皇」なることを歌いこめている。もともとユキはユクの名詞形であり、それに尊敬の接頭語がついてミユキとなることはいうまでもなく、「三行」の用字からしても、さらにこの歌句がロ（注、第二長歌）のものであることからしても、このミユキを天皇の行幸と解釈することが正しいか

どうか、私には甚だ疑問である。思うにこの句はイ（注、第一長歌）の「旅行く君が還り来るまで」に対応するものではなかろうか。イの反歌に「わが行き」とあり、作者も同行の一人であつたらしいから、イの君は諸卿大夫のうちの字合をさしたものとみたい。

と説くところで尽きていよう。

また、たとい、ミユキが天皇の行幸をいう言葉として当時すでに慣例化していたとしても、虫麻呂がそれをあえて「諸卿大夫等」の一人である「君」の難波行きに對して用い、それによつて「君」の難波行きをたたえようとすることはあり得ることであらう。

たとえば、「大殿」という言葉がある。本来、豪壮な建物をさす言葉であるけれども、『萬葉集』においてはより限定されて、天皇・皇子の御殿をさして用いられている（一二九以下十例中九例）。が、その中にあつて、貴人の邸宅に對して用いたと見られる例がある。

大殿のこのもとほりの 雪な踏みそね しばしばも降らぬ
雪ぞ 山のに降りし雪ぞ ゆめ寄るな 人や な踏みそ
ね 雪は (一九四二七)

反歌一首

ありつつも見したまはむぞ大殿のこのもとほりの雪な踏み
そね (四三二八)

右の二首の歌は、三形沙弥、贈左大臣藤原北卿が語を承けて作り誦む。これを聞きて伝ふるは、笠朝臣子君。また後に伝へ読むひとは、越中の国の掾久米朝臣広繩ぞ。

左注によつて、右の二首は、左大臣藤原北卿房前の邸宅における集いにおいて、主人房前の言葉をうけて三形沙弥がうった歌と捉えられる。すなわち、この歌における「大殿」は、房前の邸宅をさしているものと見られる（『背木生子』「全注十九」参照）。三形沙弥は、慣例としては天皇・皇子の御殿をさす「大殿」の語をあえて房前の邸宅に對して用い、主人に対する敬意を押し出さうとしたのではないかと考えられる。虫麻呂歌における「君がみ行き」も、これと同様な意圖によつてうたわれたと見ることが可能である。

(3)

難波宮は、大化元年（六四五）十二月の難波遷都に伴つて造営された難波長柄豊崎宮にはじまり、壬申の乱以後、天武天皇によつて整備された。が、朱鳥元年（六八六）正月、失火のために宮室はことごとく焼失した（『日本書紀』）。焼失後も、持統上皇や文武・元正・聖武天皇が難波宮に行幸しているもので、何らかの形で存続したと察せられるけれども、神龜三年（七二六）十月、藤原字合が知造難波宮事に任じられ、難波宮の本格的な再建工事が開始されたと見られる。そして、右に掲げた天平四年三月の記事により、この頃、工事は一段落したと考えられる（『新日本古典文学大系』「続日本紀」二 岩波書店、一九九〇年など参照）。

(4)

「虫麻呂歌集」が藤原字合に献呈する歌集であるならば、その内部においては「天平四年春三月」と記さずとも「春三月」のみで意を尽くしていたのであらう。

ちなみに、天平四年三月二十六日は、太陰曆（グレゴリオ曆）では四月二十九日にあたる（加藤興三郎『日本陰陽暦日対照表』）

ニットー・一九九二年による。以下同じ。四月二十九日といえ、桜の状態は、あたかも歌にあるような状態であったのではないかと想像される。事実、虫麻呂たちが目にした桜の花の状態としてはけつして恵まれたものではなかったけれども、天平四年三月という記念すべき春の、行賞をうけた宇合とともに龍田道を越える時のめでたさを封じ込めているとすれば、かような状態の桜のことがうたわれている理由も理解できよう。

ただし、大伴家持に、

独り龍田山の桜花を惜しむ歌

龍田山見つ越え来し桜花散りか過ぎなむ我が帰るとに

(20四三九五)

という歌がある。この歌は、天平勝宝七歳(七五五)の二月十七日、太陽暦四月十七日の作である。また、同じく家持に、

ふふめりし花のはじめに來し我や散りなむ後に都へ行か

む

(20四四三五)

という歌もある。難波において、防人を検校する勅使・兵部の使人等と宴飲した時の歌で、同年三月三日、太陽暦四月二十二日の作である。これらの歌に照らしてみれば、天平四年の三月二十六日、太陽暦四月二十九日は、桜の時期として遅く、虫麻呂歌にうたわれている桜の状態さえも望めないような時期ではないかという疑問も生じる。しかし、桜は種類が多い。少なくとも虫麻呂がうたっているのは龍田道の山桜と察せられる(「瀧の上の小鞍の嶺に咲きををる桜の花」「向かつ峰の桜の花」)。山桜系統の桜は、ソメイヨシノなどに比べて開花期がおおむね遅く、たとえば、最も古くから知られている品種、奈良八重桜

(ヤマザクラ群カスミザクラ系)は、四月下旬から五月上旬に開花する(『四季花事典』小学館・一九九二年参照)。もちろん、虫麻呂がうたう桜の種別は限定できないし、あるいはまた天平四年当時の生態系、その年の気候状態などの諸条件についても不明というほかはない。加えて、歌であればそれなりの虚構もある。だから、こうした詮索に重きを置くことはできないけれども、現実的な問題として、太陽暦四月二十九日頃に、桜が虫麻呂歌にあるような状態であることはあり得る、ということ是可以である。

(5)

これらの中において、一種独特なのは、柿本人麻呂の石見相聞歌と泣血哀慟歌である。ともに、儀礼の歌ではなく、私的な要素をもつ。しかしながら、これらについても、単に私情を表現したものではなく、宮廷内において披露されたものであること、伊藤博「石見相聞歌の構造と形成」(『萬葉集の歌人と作品』上)『塙書房』一九七五年、初出一九七三年)、同「歌俳優の哀歌」(同書、初出一九六六年)などによって明らかにされており、聞き手の要請をうけて歌い継ぐことによって形成された可能性があること、渡辺護「泣血哀慟歌二首」(『萬葉集の題材と表現』大学教育出版・二〇〇五年、初出一九七一年)などによって説かれている。

一方、家持の安積皇子挽歌が公的な歌であることは、山本健吉「大伴家持」(『筑摩書房』一九七四年)などによって説かれており、さらに、集団・儀礼的な場が存したと見られること、青木生子「宮廷挽歌の終焉―大伴家持と安積皇子挽歌―」(文学第四十三巻第四号・一九七五年)、身崎壽「安積皇子挽歌試

論」(『萬葉第九十号・一九七五年』)などに示されている。

なお、長歌二首として、虫麻呂の作は、赤人作と並び、句数が最も少ない。歌の内容からしても、虫麻呂の難波に下る時の歌は、即興的につくられたような印象があるが、句数の少なさは、実際、そのようにしか作歌できない状況に虫麻呂が置かれていたことを物語っているようである。

(6) 虫麻呂は一夜を過ごすためだけに難波に下ったことになる。虫麻呂は何のために難波に同行したのか。その夜、難波において、難波宮完成を祝う式典のようなものが用意されており、その後の宴などで歌を披露するように、虫麻呂が宇合から要請をうけていたのではないか。この想定に立つとき、虫麻呂の歌の中に、まさしくそういう場で披露されたのではないかと見られる歌がある。浦島伝説歌(917401)がそれである。このことについては、拙稿「水江の浦島子を詠む歌」(『セミナー 万葉の歌人と作品 第七巻』和泉書院・二〇〇一年)において言及した。

(7) 金井清一「高橋虫麻呂と藤原宇合」(『万葉詩史の論』笠間書房・一九八四年、初出一九八一年)に、この反歌について、「虫麻呂は饗礼上の表現として、あるべき理想の武人の姿を描いて、宇合周囲の期待を代弁したのである。武運長久を予祝する賀の心を周囲の人々になりかわって扈從歌人虫麻呂が歌ったのである」と説く。

(8) 『萬葉集』に収録されている宇合の歌は、172、332、81535、91729・1730・1731。

(9) 虫麻呂が、『虫麻呂歌集』を宇合に献呈したのは、西海道節

度使に任ぜられた宇合を送るその送別の席においてであったかもしれない。歌集の題字には、「歌集 高橋連虫麻呂」とあったか(伊藤博「万葉の私家集」『萬葉集の歌人と作品 上』塙書房・一九七五年、初出一九六九年参照)。あるいは、『高橋連虫麻呂之歌集』とあったか(渡瀬昌忠「人麻呂の『歌集』とその書名」『万葉集と人麻呂歌集』おうふう・二〇〇三年、初出一九七三年参照)。そして、あるいは、当面の長反歌一首を詠みあげ、その浄書を歌集に合わせて献じたか。「虫麻呂歌集」は、その後、藤原式家に伝えられ、宇合の子、藤原宿奈麻呂などの手を経て、大伴家持の手にわたったものと見られる(金井清一「高橋虫麻呂と藤原宇合」前掲)。

(にしこおり ひろふみ 阿南工業高等専門学校教授)

研究室受贈圖書雑誌目録Ⅱ

年報 福永武彦の世界(科学研究費助成金プロジェクト「昭和文学の結節点としての福永武彦―古事記からヌーヴォロマンまで」)

〈図録・目録〉

キトラ古墳壁画四神(飛鳥資料館)